

〔枕草子〕入むかしおぼえてふようなる物

七尺の。かづらのあかくなりたる

〔玉海〕元暦元年十一月十八日癸卯、此日踐祚鳥羽、大嘗祭也。廿二日丁未、大將實子、五節裝束

已下饗祿等注文略。○中 午日例年辰日也、大嘗會畢、以七尺鬢理髮用也。一調度略。○中 一理髮具 末額

七尺鬢

鬢用法

〔雍州府志〕七土產、髮心 凡倭俗婦人、頭髮稀少者、別束長髮、是爲心、或謂添、則結之、或下之、結者一所圍

繞、而置頂上之謂也、下者束髮於一所、垂其末於背後、是謂下、又等其身垂髮於下、是謂滑スラカスト、女子髮添號

加文字、加美之下、略美字者也。略○中 近世男子、亦治容而少髮者、聚他人之落髮、相加自己之頭髮、今俗

所稱野郎、亦少髮者如此、又少年著假髮之長、爲婦人之粧、而歌舞、

〔めのとのさうし〕もし御ぐしなどすくなく、おんかづらにてつくるひ給ふことありとも、よく

よく御身にそふやうにうつくしく、まなさせたまへ、まことのやとひもの、やうに、かづらのふ

しめきたるは、はしきものなり、よるなどもかひととりて、御枕のあたりにをかれ候へ、たぬるも

おくるも、身にこゝろのそひたるがよきにて候。略○下

〔大上臈御名之事〕一かもじは、三ところもとがみにつくるなり、

一おくれのかみをば、兩方よりとりて、ぼのくぼにてくむなり、くみとゞめのもとをとゞめね共

上のかみのまにそのま、おく也、

一かもじゆふこと、まづかみのうゑのきわをびんのかみをのけてゆひて、まをそろへてけづ

る也、いれもとひして上はとくなり、かもじのおほきすくなきは、若き人と年よりは、すくなし、そ

のほかは、よきころたるべし、かもじのまやくは、さだまりたり、人たけによるべからず、あまらば

そのま、たるべし、